

これからのみすみ農業

「一町一農場」

新たな年を迎えて

○ 転作の団地化を目ざす

昭和62年度の本町転作面積は二八・五%でした。当然、指示数量の一〇〇%は消化し、そのうち五五・二%が団地化が行われています。この団地化率は県下では最高の転作団地化率となっています。これも農区長を中心に地域リーダーの活躍の賜物と感謝いたしております。御承知のように農産物の輸入緩和の進展とあわ

○ 土づくりをすすめる

昨年、第7農区の上で「減農薬、有機米」の展示圃、一・五ヘクタールを実施しました。参加農家の方で10アール当り10トンの堆肥を投入された方もあります。先日、農協の情報によりまずと県農試の新たに設置した米の食味検査の計器の数字から県下最高の数値を出したと聞いております。やはり土地条件の良い

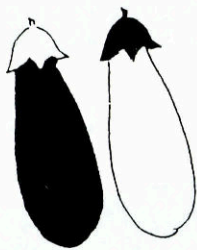
ところに堆肥を投入し健全な水稻を栽培した結果と思えます。また、本年から夏秋茄子の産地をすすめています。対象市場である大阪北市場の大豆の木下部長は、これからの野菜産地は堆肥資源の量によって将来が決定されると言い切っております。本町には二つの堆肥センターがあり年間、一万二千トンの堆肥を生産してお

ります。一方堆肥の機械散布のシステムも整備されており、土づくりに力を入れていただきたいと思えます。

○ 大型機械による生産システム化を図る

63年には農業機械銀行に大型トラクター（80馬力）二台、一行程作業アタッチ（耕起、整地、施肥、播種、除草剤散布を同時に実施する）二台、大型コンバイン一台を整備しました。現在は集団の小麦、大豆に利用していますが、どちらも10アール当り三〇分以内で作業が完了出来ます。また作業料金も約五、〇〇〇円程度で実施できますので生産のコストの低減につながり

○ 夏秋なすの産地化を図る



うに利用するかを考えねばなりません。また団地化により高齢者、婦人が参加し易い栽培体系をつくり出すなど新たな戦略作物として定着化、産地化を図る方針です。一方販売価格が気になるところですが過去の統計からも安定しており栽培技術の向上次第で10トン以上の生産ががり収益を高める期待も持てると思えます。そして、この夏秋茄子を基盤として新たな野菜、花き等の特産振興をすすめる「一町一農場」の集大成を図っていく考えです。

本年度から三隅、長門、福栄の産地連合により夏秋茄子の大阪北市場への出荷を計画しております。本町では三ヘクタールの夏秋茄子の団地化を推進しております。前項のように水稻、麦、大豆等が大型機械体系により省力化がすすみますと余剰労力をどのよ

